

# 配慮表現における断定緩和機能について

S07 (漢字・カナ表記)

## 1. はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における配慮表現の断定緩和機能について、言語形式と話の場の発話状況・人間関係の観点による分析によって明らかにすることである。大学院のゼミの談話を分析を通じて配慮表現について研究することは、高等教育機関で行われる留学生教育において、学習者が配慮表現についてどのような場面で、どのような目的をもって配慮表現が使われ、またそれには具体的にどのような表現があるか自覚することができると思われる。そのことは単なる言語能力の向上のためだけでなく、人と人との互いの人間関係を含めた状況からどのような言語行動が行われるかという、一層幅広い観点で日本語・日本文化を理解する機会になると考えられる。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

野田尚史 (2014) は配慮表現を「聞き手や読み手に悪い感情を持たれないようにするために使う表現」だと定義し、配慮表現を機能の面から上位待遇・断定緩和・共感表明・負担表明・謝罪・理由説明の六つの種類に分類した。本稿で取り上げる配慮表現の「断定緩和」機能はこの分類方法を基にしている。

윤상실・이지현(2013)では日本語配慮表現における主要類型を形態的レベル・語彙的レベルの二つに分け、各々の配慮表現の原理と特徴の分析した。本稿で取り上げる配慮表現の断定緩和機能は、形態的レベル分けの「非確言型」に当てはまる。윤상실・이지현は非確言型は形態的レベルの中でもっとも比重が高いものであり、「確言型との対比から配慮のニュアンスが容易に確認できる」と述べている。

また、守屋三千代 (2004) は「話し手の尊厳やその人らしさなどを損なうことなく、意志や意向が 過不足なく伝わるよう、かつ聞き手との関係を望ましい形で維持できる」ように様々な配慮をこめた言語表現を配慮表現と呼び、日本語の構造的特徴と密接に関わっていることを指摘し、日本語の文法構造から 配慮表現を分析した。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、配慮表現の持つ断定緩和機能の分析という観点に絞った研究はない。そこで、私は配慮表現の中でも特に断定緩和の表現にはどのようなものがあるか具体的に例を取り上げ、それらをまず言語形式から分類し、それだけでなく話の場の発話状況・人間関係の観点からも考察することを目的とする。したがって、今回の分析では配慮表現を文法的構造といった言語形式に限らず、配慮表現が使われる場面、すなわち話の場の人間関係や発話状況をも視野に入れる。この分析は配慮表現が持つ断定緩和機能を明確化するだけでなく、語用論的観点による配慮表現の多様性の研究にもなるのでその意義があると思われる。

## 3. 研究の思慮と分析の方法

研究の資料は、2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものである。

一つは、外国語学習における絵本多読の可能性をテーマに行われた3人の談話を文字化したものであり、もう一つは中国人留学生が日本語で文章を書くことを困難にする要因をテーマに行われた5人の談話を文字化したものである。

そして、その文字化データから配慮表現の観点からデータを抽出し、その中でも断定緩和の機

能を持つ表現について分析を行った。

#### 4. 分析の結果

まず、表現の形式からみた断定緩和の配慮表現の例は次のようである。

- ①言語のちがいによって、文字の種類の違いとかが、その、出てくると思うので
- ②絵本だけを読んでいるわけではないでしょうから
- ③考察するっていうことはできるような気がするんです
- ④ここから抽出できるかもしれない
- ⑤意味がないとは思わないんですけども
- ⑥ちょっとかぶってるところがあるんじゃないかっていうふうに

例①～⑥は「文末のモダリティ表現」という形式から分類した断定緩和の配慮表現である。「と思う／と（は）思はない」「でしょう（だろう）」「ようだ」「かもしれない」「じゃないか（のではないか）」はすべてあることについて断定を避ける婉曲な表現として使われているため、例①～⑥には推量のモダリティがく加わったと言える。

- ⑦たぶんその、因子分析で、～いいと思うんですけど、
- ⑧ちょっとだけ思ったんですけど

例⑦～⑧の「たぶん」「ちょっと」はモダリティの中で文副詞に該当するものであり、間接的な表現として使われ話者の断定を緩和させている。

- ⑨ちょっと私もわからないんですけど、その点についてどう考えていますか。
- ⑩変わってくると思うので、何とも言えないんですけど。
- ⑪あの一、あんまり詳しくないんですけど、解釈っていうので、

例⑨～⑪に使われた「わからないんですけど」「何とも言えないんですけど」「あんまり詳しくないんですけど」は前置き表現として捉えることができる。陳臻渝（2007）によると、前置き表現とは話し手の主観が含まれている、「何らかの配慮によって用いられ主要な言語内容に先立つ表現」だと述べており、前置き表現を対人関係に対する配慮を表すか、それとも伝達性への配慮を示すかによって「対人配慮型」と「伝達性配慮型」の2種類に分けている。例⑨～⑪はその中でも話し手が自分自身のことを謙遜することによって対人的配慮を示す「謙遜表明」前置き表現に当てはまるだろう。

- ⑫単純に比較できない部分もあるかなというのと、
- ⑬もうちょっと分かりやすいかなっていう
- ⑭見ていった方がいいかと思います
- ⑮そういうのもあるかなと思って

例⑫～⑮は不確実性を表す助詞「か」が使われ、文の断定を避けている。

一方で、二つの資料を分析した結果、配慮表現は著しく質問者側で多く使われていることが分かった。二つの資料では総約30個の配慮表現が使われているが、その中で発表者が使った配

慮表現は「と思う」の文末のモダリティ表現が使われた2カ所だけである。つまり、二つの資料がゼミの状況であることを考えると、ゼミナールにおいて配慮表現は発表者より質問者から使われる頻度が非常に高いということが分かる。

また、話の場の人間関係においては、ゼミナールに参加した学生・先生両方が断定緩和の配慮表現を使っていた。また、一般化することは難しいが、今回の資料では学生より先生の方がより多くの断定緩和の配慮表現を使っていたことが注目すべきところである。

牧原(2010)は配慮表現を使う理由として「話し手の意見が正しくない可能性を示し、聞き手に対するFTA（フェイス脅かし行為）を緩和する」ためであると述べている。ゼミナールが行われる状況を考えると、二つの資料からもFTAを緩和するための工夫として質問者側で様々な配慮表現が上手く使われている。質問者は常に文末に推測のモダリティを加えたり、謙遜の前置き表現などを用いながら発表者に対する「上から目線」を避けているのである。

ここで注意すべきなのは、二つの資料からみてゼミナールという状況で使われる配慮表現は年代や先生と学生という上下関係には影響されないことである。資料かみると、「先生」の立場にいる話しても発表者に対し非常に多くの配慮表現を使っている。本稿ではゼミナールという状況だけを分析対象とするため、他の話し手と聞き手が置かれる状況でもこのことが適用できるかは研究が必要である。